上東門第と小野宮第に於ける道長・頼通と実資の居所について

－その違いの要因－

ON THE WHEREABOUTS OF FUJIWARA-NO-MICHINAGA (藤原道長),
FUJIWARA-NO-YORIMICHI (藤原頼通) AND FUJIWARA-NO-SANESUKE (藤原実資)
IN JOTOMON-DAI (上東門第) AND ONONOMIYA-DAI (小野宮第)

－ The reason of the difference between these whereabouts －

飯淵 康一*

Kouichi IIBUCHI

On the Jotomon-dai(上東門第) and Ononomiya-dai(小野宮第), the following points were clarified:

1. The whereabouts for Empress of the Emperor in Jotomondai(上東門第) was Shinden(寝殿).
2. The whereabouts for Fujiwara-no-sanesuke(藤原実資) in Ononomiya-dai(小野宮第) was Shinden(寝殿), and the whereabouts for Fujiwara-no-Michinaga(藤原道長) in Jotomon-dai(上東門第) was Tai(対).
3. The difference of the whereabouts of the master in Jotomon-dai(上東門第) and Ononomiya-dai(小野宮第) is caused by a regent and the chief adviser to the Emperor system..

Keywords : Heian period, Jotomon-dai, Ononomiya-dai, whereabouts

平安時代, 上東門第, 小野宮第, 居所

序

筆者は平安時代貴族住宅の東・西対で開催された儀式に着目し、儀式空間と対の平面規模との関係を様々な観点から明らかにしようと努めてきた¹⁾。また最近の別論では、当時の貴族住宅の中で重要な位置を占めた摂関家たる藤原道長と頼通の上東門第と右大臣藤原実資の小野宮第に着目し、対の儀式空間の違いを具体的に示すと同時にその違いの要因についても明らかにしようと試みている²⁾。上東門第では対の儀式空間は南面に展開されていたが、小野宮第では東・西庇のうちの寝殿側の庇がそのために用いられており、これらの違いには道長・頼通と実資がそれぞれの住宅に於て用いた居所としての建物³⁾の違いが影響すると考えられた。道長・頼通は対を居所として用い、実資は寝殿をそのために充てていたのである。

それでは何故両者の居所にこのような違いが現れるのであろうか。小野宮第で寝殿は実資の居所として用いられていたが、上東門第で寝殿はどの様に使われていたのだろうか。もし寝殿が道長と頼通に居所としての使用を遠慮させる様な空間であったとするならば、その様になった要因を明らかにしたい。上東門第の寝殿の用法を見ると、第1期⁴⁾については、長和4年(1015)10月25日の道長五十賀の法会が知られ、第2期については寛仁2年(1018)10月22日の後一条天皇の行幸時の用法、治安3年(1023)10月13日の道長室・倫子の六

十賀、万寿2年(1025)3月20日の法華経御読経⁵⁾があげられる。しかしながら、これらの儀式・行事は頻度も低く、これだけで道長・頼通が寝殿を居所として用いずに対を使用したことの理由にはならない。

ところで、上東門第が小野宮第と大きく異なるのは摂関家住宅であり、天皇の中宮等として入内した道長の女(むすめ)の里第として用いられたことである。本論では、里第としての使用が道長・頼通の居所の選択に影響を与えたのではないかと仮説を立て、中宮等の御在所として使われた建物を明らかにしながらその確認を行う事とする。また、やはり摂関時代に重要な役割を担った住宅、関白頼通の高陽院についても同様の観点から検討を行う。次に、中宮等の里第として用いられなかった実資の小野宮第と、使われる予定のなかった道長の二条殿を取り上げ、小野宮第については寝殿が実資の居所であったことを記録により改めて確認すると共に、二条殿については寝殿が上表の会場となったことに着目し、他の住宅の上表の会場となった建物の性格を検討することにより二条殿の寝殿が道長の居所であった事を示したい。そしてこれらをもとに、上東門第と小野宮第に於ける道長・頼通と実資の居所の違いの要因について、上に記した仮説の妥当性を示したい。

* 東北大学大学院工学研究科 教授・工博

Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

第1章 上東門第に於ける中宮等の御在所

本題に入る前に上東門第について説明しておきたい。ここで扱うのは、用法が比較的良く知られるという点から第1期及び第2期のものに関してである。共に道長に属したが、第2期についてはその男(むすこ)・頼通も用いている。第1期は正暦2年(991)頃から長和5年(1016)に焼失するまでの間のもの、第2期は寛仁2年(1018)に道長が新造移徙してから長元4年(1031)に罹災するまでの間存続したものを指す。規模について言えば共に、寝殿の左右に立派な対を備えた堂々たる住宅であった⁶⁾。

さて、上東門第は入内し中宮等となった道長女・彰子(一条后)、妍子(三条后)、威子(後一条后)の里第として屢々用いられた。例えば彰子に着目すると、彰子は上東門第で生まれたとされているが⁷⁾、第1期の上東門第については女御、中宮、皇太后宮の各時代を通して用い、第2期については太皇太后宮及び女院の時代に使用している⁸⁾。以下、彰子、妍子、威子についてそれぞれ、御在所として用いられた建物を明らかにしていきたい。

まず彰子から紹介していこう。長保2年(1000)2月25日、女御彰子は立后に備え第1期上東門第に渡った。内裏での宣命使による立後の宣命宣読及び宮司除目の後、この第で立后饗が開催された。多くの貴族たちが参加したが、『権記』同日条によれば、

參中宮、(大臣以下清書之後、可被參中宮也、)因御消息、相過藤三位、問理髮事、(被奉仕可宜之由、内々相示也、)中宮御寢殿、東對南放出四間、母屋南北行東西對座、鋪高麗端土敷、上鋪圓座、爲參議以上座、(並北上、親王著東座、鋪錦端疊、大臣著西座、及納言以下參議以上座、例高麗端、)南廂鋪兩面端疊、爲四位侍從座、南廊鋪紫端疊、爲五位侍從座、皆豫備俎上饌、東孫廂儲殿上人座、(予仰春宮屬錦信理令奉仕、)⁹⁾

と記される。貴族たちは東対に座を占め、中宮彰子は寢殿に御座した事が知られる。中宮彰子の御在所が寢殿であった事をより具体的に示す例として『御産部類記』寛弘5年(1008)9月11日条があげられよう。彰子は出産に備え7月16日に時の皇居たる一条殿から上東門第に移っていたが、9月11日に皇子敦成を出産した。

於上東門院有御産事、(寢殿北母屋庇爲御座所、)先是自十日曉更、有御氣色、仍彼日寅刻撤尋常御帳、立白木帳、(有蟬翼帷、薄物紐等、)白綾面御屏風十二帖、同御几帳、(薄物帷紐、)并白端差御座供之、

御産に伴い彰子の尋常御帳の場所に出産のための白木御帳が立てられ、寢殿北母屋庇が(出産に備えての)御座所にあてられたことが記されており、従ってこの尋常御帳は寢殿に設けられていた事が知られる。即ち彰子の御在所は寢殿であった。彰子が皇太后宮となつてからの例としては『小右記』長和4年(1015)10月25日条が注目される。この日彰子は上東門第で道長五十賀の法会を催したが、

撤御在所、(寢殿、)爲法會堂、佛具新調、幡・花繻代同調、花繻代殿上人調進云々、

とあり、彰子の御在所たる寢殿が法会の会場となった事が知られる。また、同12月4日条は、彰子が生んだ一条天皇第三皇子・敦良親王の読書始について記したものである。その会場は東対であったが、

今日先朝第三皇子書始日也、相扶所勞、申剋許參皇太后宮、(上東門、)今日母后自寢殿假移給東對、於此處依可有御書初事、とあり、彰子は(御在所である)寢殿から東対に仮に移った事が知ら

れる。以上の皇太后宮時代の2例も寢殿が彰子の御在所であったことを明確に示している。

第2期については太皇太后宮時代の例が知られるが、まず『左経記』治安2年(1022)7月8日条があげられよう。この日中宮威子は上東門第に渡ったが、これは数日後の14日に道長によって催される筈の法成寺金堂供養に参加するためであった。

今夜戌剋中宮遷御上東門院、暫御車留中門外、先令中宮權大夫能信卿、被啓可入御車之由於口宮、(大宮兼遷御寢殿、)早有可入御^{之カ}々々返事、仍於中門外昇下、引入下御西對

威子が西対に着いた事と同時に太皇太后宮彰子の御在所が寢殿であった事が知られる。彰子は威子よりも前に上東門第に移っていた。威子が西対を用いたのは、彰子に遠慮したためと思われる。次は『小右記』治安3年(1023)4月1日条である。この日禎子内親王の著裳の儀が太皇太后宮彰子御所・上東門第で開催された。会場は西対であったが、禎子内親王と共に母親たる皇太后妍子もこの第に移ってきている。

今日無品禎子内親王於太皇太后宮(上東門院、)有着裳事、申時^(藤原妍子)皇太后禎子内親王同車度給太后宮、…(中略)…關白云、皇太后宮口西對臨、禎子着裳剋限(亥二點、)太皇^(太)太后從寢殿可渡給、結給裳腰遷時、皇太后・禎子内^{親王}可^被候御選、

関白頼通は、太皇太后宮彰子が寢殿より西対に渡って参加すべき事を述べている。この例も寢殿が彰子の御在所として用いられていた事を示していよう。

さて、妍子についてである。妍子上東門第で生まれたとされているが¹⁰⁾、三条天皇の後として長和元年(1012)2月14日に中宮となり、寛仁2年(1018)10月16日皇太后となった。上東門第については彰子ほど多くはないものの中宮時代、皇太后宮時代に用いている。具体的に御在所としての建物が知られるのは、やはり出産のための用例からであろう。長和2年(1013)4月13日、中宮妍子は出産に備え上東門第に遷啓したが¹¹⁾『御堂関白記』同日条に、

御土御門南階、寄御輿又如常、とあるように(寢殿の)南階に御輿を寄せた事から、寢殿を御在所とした事が推定される。より具体的には皇女禎子誕生に伴う五十日儀に関する『小右記』同8月27日条より知ることができよう。

西時許參中宮、(左府土御門家、今日皇女子五十日也、)自東門參入、左相府率卿相、從西對度寢殿簾前、來向東對、(后御在所寢殿、人々度簾前甚無便、)東對設上達部、殿上人座、(西面上達部、南面殿上人、)諸大夫座在東廊、

上に紹介したのは第1期上東門第についてであったが、第2期については、皇太后宮時代の寛仁4年(1020)6月10日の『左経記』条に、及晚景參關白殿、令渡土御門院西對給、(皇太后宮御寢殿、)と記されている。関白頼通が西対に渡った事を示した記録であるが、妍子の御在所が寢殿であった事も同時に明確に知られるのである。因みに妍子は、同年3月20日に上東門第に移っていた¹²⁾。

威子も彰子、妍子と同様上東門第で生まれたとされているが¹³⁾、後一条天皇の後として寛仁2年(1018)4月28日に女御、同10月16日には中宮となっている。威子が上東門第を用いたのは女御、中宮時代である。寛仁2年(1018)10月5日、女御威子は立后に備え、内裏¹⁴⁾より上東門第に退出した。『御堂関白記』同日条には、

出從上東門、御土御門寢殿、上達部・殿上人座儲西對唐廂、

とあり、また翌6日条には勅使を迎えた事に関し、

從内有御使、定良、寢殿從西第三間設座、左大將取御書後着座、上達部十餘人來着彼座邊、進盃、と記される。いずれの条も威子の御在所が寢殿であった事を物語っている。

以上、時の天皇の後となった道長の女・彰子、妍子、威子について、第1期および第2期の上東門第に於て御在所として用いられた建物を明らかにしてきた。ここで紹介できなかった他の例を含めてみてみてもいずれも寢殿がそのために充てられており、対が用いられる事はなかったのである¹⁵⁾。

道長の女ではないが、道長父・兼家の女で、天元元年(978)11月14日に円融天皇の女御となり正暦2年(991)9月16日に院号を得た藤原詮子がそのご幾度か上東門第を用いている¹⁶⁾。御在所としての建物が具体的に知られる例は多くはないが、長保3年(1001)10月9日に催された女院詮子の四十賀の記事が注目される。詮子は前日、上東門第に渡っていたが、当日には天皇も行幸し西対を休息所とした。『権記』同日条によると、

宸儀先御西對御休息所、此院殿上裝束昨日供奉、主上自西對御寢殿、有御拜禮云々、とあり、一条天皇は寢殿に御座する母親の詮子に拝礼した事が知られる。『小右記』長徳2年(996)3月28日条も興味深い¹⁷⁾。

早朝參女院、謁右大臣、院御惱昨日極重、被停院號、年爵、年官等事之由、昨夜被奏聞了、又云、或人呪咀云々、人之厭物、自寢殿板敷下掘出云々、この記事は病に苦しむ女院への厭物が寢殿の床下から掘り出された事を示したものであるが、換言すれば寢殿が詮子の御在所であった事をも物語る例となっている。詮子については以上の2例のみであるが、いずれも寢殿が御在所として用いられていた事を示している。

彰子、妍子、威子、そして詮子については以上であるが、数は少ないものの、上東門第がこれらの御所として用いられていた時の道長あるいは頼通の居所が知られる例があるので紹介しておきたい。長和元年(1012)6月8日、皇太后宮彰子は道長の病氣見舞いのためか枇杷殿から上東門第に行啓した。還御は7月8日であるが『小右記』同日条には、

今夜還給本宮、(枇杷殿、)有調伏邪氣之聲、靈物未去歟、上達部卿在相敷西對南唐庇、侍從饗在西中門北廊、殿上人饗在同對西廊、…(中略)…亥初寄御車、(絲毛、)と記される。上達部座が西對南唐庇に設けられた事から、彰子が乗るべき御車が寄せられたのは寢殿(南階)であったことが知られ、従って彰子は寢殿を御在所としていた事が推定されるが、彰子が滞在していた期間の6月9日について『小右記』には以下のような記事がある。

相府歸西對、この記録は、道長が病により法華三十講を修めるため連日御堂に通っていた間のものである。道長は西対を居所としていた事が知られよう。

次は皇太后宮妍子に関する例からのものである。これについては前にも『左経記』寛仁4年(1020)6月10日条をあげて紹介しており、妍子が寢殿をそして関白頼通が西対を用いていた事が知られる¹⁸⁾。

以上のように、道長、頼通は対を居所として用いており、上東門第に於て彰子や妍子と道長や頼通が住み分けしていたことが知られるのである。

第2章 高陽院に於ける彰子の御在所

摂関全盛時代、道長男・頼通の女(むすめ)であった姫子、寛子も時の天皇・後朱雀、後冷泉の後となって入内した。姫子は頼通の養女であったが、長暦元年(1037)正月7日に頼通が当時用いていた高倉殿¹⁹⁾より入内し、同3月1日に中宮となった²⁰⁾。同11月13日、出産に備え高倉殿に移り²¹⁾、翌年の4月21日、皇女祐子を出産した²²⁾。長暦3年(1039)8月にも皇女祿子を出産した²³⁾が、その場所は高倉殿と考えられる²⁴⁾。従って、姫子の里第は高倉殿であったが、残念ながら高倉殿での用法は詳らかではない。一方、寛子は永承5年(1050)12月22日、高陽院²⁵⁾あるいは東三条殿のいずれかより入内し、翌年の2月23日には東三条殿²⁶⁾で立后饗が催されている。しかしながら寛子は終生出産することがなかった。この時期の寛子について、高陽院あるいは東三条殿での用法はやはり不詳である。

以上の様に、天皇の後として入内した頼通女の里第の用法は知られず、摂関時代に重要な役割を果たした住宅・頼通の高陽院についても同様であるが、この高陽院が、太皇太后宮および女院時代の彰子によって使われているので²⁷⁾、その際の彰子の御在所としての建物を明らかにしていきたい。ここで扱う高陽院は太田静六氏の分類による第1期のもので、治安元年(1021)に創建され長暦3年(1039)に罹災するまでの間存続したものを指す。寢殿を中心として東西に対を備えた堂々たる住宅で、道長の上東門第を凌ぐとさえ言われていた²⁸⁾。

さて、『小記目録』万寿元年(1024)9月14日条によれば、太皇太后宮彰子は高陽院に行啓している。この日について『栄花物語』巻23には、

寢殿の南のはしのつまに御こしよせておりさせ給ぬとあって、寢殿に御輿をつけた事が知られ、寢殿を御在所とした事が推定される。それから程なくの同19日に頼通が催した競馬御覧のための行幸および東宮の行啓について『小右記』同日条には、
到御關白第、(所謂高陽口、)留鳳輦、先以左頭中將公成啓達案内、關白祇候、(行幸間騎馬扈從御輿後、)即有御報、進乘輿于中門、先是鋪長筵、居御輿、敷筵道、到西對・渡殿・寢殿、内侍二人迎候、右三位中將執御劔、左頭中將公成取神璽、内侍受取御劔・璽(殿)、
宮、震儀經西對・渡殿等入御寢殿御簾内、とされ、天皇は西対を経て寢殿の簾内に入った事が知られるが、この寢殿は続いて記される、

太弟入御西對休廬、即從内參太后御在所給歟、(太后御在所則寢殿、)により、実は彰子の御在所として使われていたという事が導かれるのである。彰子は同月21日に内裏に還啓している²⁹⁾。

次に紹介するのは彰子が女院時代の例である。長元元年(1028)5月14日、彰子は御所として用いていた上東門第³⁰⁾から方違のため頼通の高陽院に行啓した。『左経記』同日条によると、

早旦參關白殿、今夜爲違方、女院可令渡給者、仍寢殿御裝束、其儀御障子等如^(常力)、

とあり、寝殿が彰子の御在所として用いられた事が知られる。

次も女院時代の例であるが、これについては若干の注意が必要である。長元4年(1031)12月11日、彰子はそれまで用いていた上東門第が焼失したため高陽院に移った。『左経記』同日条によると、

亥剋女院令渡高陽院殿西對給、
とあって、西対を御在所とした事が知られる。彰子はこの高陽院を翌長元5年(1032)12月19日に前大貳惟憲家に移徙するまでの間用いたが³¹⁾、実はこの時期西対が彰子の御在所であった事を示す例が他にも見られるのである。長元5年(1032)4月8日、彰子はこの高陽院で灌仏会を催した。『左経記』同日条によると、

次灌佛、(但不精進、又不念誦、)及晩參女院、依御灌佛也、其儀、御在所(西臺、)南廂三間下母屋御簾上廂、中間迫簾立山形、々々東重立平文机二脚、(南北行、西机置盛五色水鉢五口、東机置御新并人給槃山形、西又重立同机二脚、置散花具、(件机等無覆地敷)、)山形前數半疊一枚、爲御導師座、傍立聲(聲カ)、南又廂西一二間敷綠端疊二枚、爲上達部座、(北面東上、)同廂東一間敷黃端疊一枚、爲弟子僧座、(北上西面、)

とあって、彰子の御在所たる西対が会場として用いられた事が知られる。内裏の清涼殿での灌仏会の場合と同様、庇と孫庇が主として用いられた事が知られる。しかしながら、彰子が高陽院を用いたこの期間、西対のみが御在所として使われたのではない。彰子が高陽院に移ってから間もなくの長元5年(1032)正月3日、後一条天皇は母親たる彰子に朝觀行幸を行った。『左経記』同日条によれば、

入自高陽院南門、經東山路、於東對前下御輿、御休所、(以東對爲御在所、以北廊爲殿上座、以東廊爲上達部座、)…(中略)…天儲次第渡御寢殿、有御拜舞云々、

とあり寝殿に御座す彰子に拝礼した事が知られる。朝觀は極めて儀式性の強い行事であるため、寝殿が彰子の御在所であったことを示す最適の例と一概には言えないかもしれない。しかしながら、この前日の正月2日についての『左経記』の記載内容は、これが確からしいことを裏付けている。この日関白頼通はこの高陽院で臨時客を催した。

次參殿、(於高陽院文殿有儲、)頃之内府被參入、主客於南庭再拜着座、(春宮大夫以下昇自東方端、)二獻飯汁、五六巡後引出物、次率被參院御方、(近來女院御座寢殿、)拜舞之被參内臨時客は文殿³²⁾を会場としたが、その後参加者は女院彰子の許に参集した。彰子は近來寝殿に御座したと記されている。以上の例に鑑みた時、長元4年(1031)12月に移徙した彰子は寝殿と西対を共に用い、なかでも朝觀の例に見る様に寝殿を正式の御在所として使用したと推定されるのである。

太皇太后宮及び女院時代の彰子については以上であるが、今回対象とした第1期高陽院について、頼通の居所が知られる例があるので紹介しておきたい。長元元年(1028)正月22日、法成寺で故道長の四十九日の法会が行われたが、その2日後の24日の記録である。『左経記』によるとこの筆者経頼は関白頼通の高陽院を訪れ服中の事について相談しているが、

從宮參關白殿、御座西對懸伊與簾、立鈍色御障子等、御疊鈍色端、藏人所垂布障子并疊縁等皆青鈍色、立黒漆大盤、頃之依召參御前、仰云、重服時移鞍先例如何、申不知之由、仰云、服近衛司(著イ)著尻鞆之時、號合子尻鞆著黒漆尻鞆、又雖不服者或有著之者云々、

とあって、頼通の居所は西対であったことが知られる。ところで前に紹介した長元5年(1032)正月2日の頼通の臨時客が対ではなく³³⁾文殿を会場とした記録は、言うまでもなく女院彰子が寝殿と西対を御在所として用いていた期間のものであった。この時期文殿が頼通の居所として用いられたことを示す明確な史料は無いがその可能性もあり、極めて興味深いものとなっている。

第3章 藤原実資の小野宮第と藤原道長の二条殿

前章までは、摂関時代に於ける藤原道長、頼通の上東門第と頼通の高陽院を取り上げ、これらの住宅が入内し時の帝の中宮や皇太后宮等になった道長女(むすめ)の里第として使われた際に、寝殿が、あるいは対の場合であっても寝殿と共に、御在所として用いられていた事を明らかにした。そしてこれらの住宅では、対が道長や頼通の居所として使われていたことを併せて示した。

それでは次に、女を入内させる事がなく、摂関の地位にも就かなかった貴族の住宅に於てその住宅の主(あるじ)の居所はどの建物に充てられていたのか、また摂関の地位に就いたにしても、入内した女が用いることを前提としなかった住宅に於てはどうだったのか、についても是非とも確認もしくは明らかにしておくべきだろう。前者の例として藤原実資の小野宮第を、後者の例として藤原道長の二条殿を取り上げ検討していきたい³⁴⁾。

まず、藤原実資の小野宮第についてであるが、周知のように実資の最高位は右大臣であり、摂関の地位にまで上り詰めることはなかった。実資には女(むすめ)が複数あり、そのうちの一人が良く知られる千古(かぐや姫)であるが³⁵⁾、これらの女が入内し時の天皇の後となることはなかったのである。実資の居所は「序」でも紹介した様に寝殿であったが、改めて示すと『小右記』寛仁3年(1019)12月21日の実資の移徙条、同治安3年(1023)正月4日の三位中将藤原長家の来邸の条によりこれが確かめられる。

藤原道長の二条殿については、筆者も触れることがあった³⁶⁾。二条殿の作事は道長によって長和2年(1013)頃から開始されている。道長がこの第に新造移徙したのは寛仁元年(1017)11月10日のことである。従来この二条殿については、道長女・威子の里第として新築されたものと見なされてきたが、実際はそうに用いられたことはなかった。二条殿は、上東門第が中宮彰子や妍子の御所・里第として用いられるに伴い、儀式会場として重要性を高めていった小南第に代わる道長の正式の儀式会場としての役割を担うべき住宅として建てられたのである。道長のこの二条殿への新造移徙は、任太政大臣大饗を催すためのものであった。この大饗は移徙後まもなくの12月4日に開催されている。上東門第の敷地内にあった小南第は大饗のような大規模の儀式を行うには相応しくなかったのである。道長はこの二条殿を移徙の後の僅か数日間用いただけで、当時使用していた一条殿に帰ったが、間もなく妻・倫子と共にこの二条殿に戻り、暫くの間居住した。

二条殿の規模については、太田静六氏により検討されているが、寝殿、東対、東西廊の存在が明らかにされ、西対の存在も推定されている³⁷⁾。

二条殿寝殿の用法が知られる記録は多くはない。前に紹介した、移徙後の大饗と翌・寛仁2年(1018)2月9日の道長の上表の例が知られる位である。大饗は任太政大臣大饗であったため母屋ではなく南

庇と東庇が主に使われている³⁸⁾。さて、上表についてである。上表とは言うまでもなく辞表を天皇に奉ることを言うが、この場合は前に任ぜられていた太政大臣を辞退するためのものであった。通常は1回では認められず3回行われる。一度目の上表は2月3日に行われ、二度目は2月5日、三度目がここに紹介する例である。この儀は来邸した勅答使への拝舞および対面などから成っている。『御堂関白記』同日条によれば、以下の様に記されている。

使來間雪降、仍於中門左大將拜之、其儀〔殿イアリ〕、寢南廂〔西間 卷イ〕、廻四尺屏風、敷長筵、敷土敷二枚、立上倚子〔立イアリ〕、拜了後取倚子、錦端一枚上敷土敷、又敷茵、西面、相對又敷畳一枚、是自座、而不出、使着座後、左大將受祿、大掛、隨身内舍人同被止、仍召内舍人隨身、助守候、給絹二疋、仰可奉仕本旨由、

即ち、寢殿南庇に勅使のための椅子が立てられ、南庭での道長の拝舞が修了した後、南庇の椅子が撤去された。その後この南庇に改めて勅使の座が置かれ、これに相対する様に道長の座が敷かれた。但し、今回は代理・教通がここに着いている。ここで教通は勅使に祿を授けた。いずれにせよ寢殿が会場となっていた。

上表についてはすでに筆者が取り上げ、接客空間の点から検討している³⁹⁾。12世紀始めに摂関を務めた藤原忠実が東三条殿あるいは高陽院⁴⁰⁾を会場とした上表について見ると、いずれも東対が会場となっており対南面の南出居と東面の内出居が使われていた。特に南面の南出居は勅使との対面が行われた最も重要な場所であった。南面出居は表向きの接客空間、内出居は内向きの接客空間としての役割を果たしていた。また、東三条殿の東対も高陽院の東対も共に忠実の居所として用いられており⁴¹⁾、従って出居は忠実の居所・東対に付属する空間と考えられた。東三条殿、高陽院に於て上表は

忠実の居所たる東対を会場として開催されていたのである。

表1は、平安時代に行われた上表に関し、その会場、特に勅使との対面が行われた建物が具体的に知られるものについて管見の及ぶものを年代順に整理したものである。東三条殿、高陽院の分も纏め併せて示してある。この表を概観すると、会場として用いられた建物は寢殿の場合と対の場合とに大別されることが知られるが、道長の二条殿、実資の小野宮第を除けば、寢殿が会場となったのは平安時代末期の住宅のみに於てであった事がわかる。これら平安末期の住宅は後述する様に対を欠くか、持ったとしても対代の場合である。一方、対が会場となった住宅の場合は東三条殿、高陽院の場合も含めて、当然のことながら寢殿、対を共に有していた。この様ななかで見ると二条殿、小野宮第は特殊な例に属するように見える。

さて、上表の会場として用いられた二条殿寢殿の性質を明らかにするために他の例について、会場となった建物の性質、具体的にはここが当時、上表の主体の居所として用いられた建物ではなかったか、との観点に立ち検討していくことにする。小野宮第の寢殿は実資の居所であり、東三条殿、高陽院の対については、忠実の場合を取り上げやはり居所として使われていた事を前に示した。これら以外についてはどうだったのだろうか。表1をもとに順に検討していきたい。

まず寛仁4年(1020)6月14日の頼通の上東門第西対についてである。この上東門第は太田静六氏の分類による第2期に属するもので、この時期頼通はこの住宅を用いていた⁴²⁾。入道前太政大臣道長は6月29日より法華三十講をこの上東門第を会場として追行していたが翌月の10日について、『小右記』には以下の様に記されている。

未一刻参卅講所、(上東門出、)^{〔第カ〕}入道殿自無量壽院步行渡給、講説

表1 上表の会場

西暦	和暦	主体	会場	備考	史料
1018	寛仁2. 2. 9	太・藤原道長	二条殿寢殿		御堂関白記
1020	寛仁4. 6. 14	関・藤原頼通	上東門第西対		左経記
1021	治安元. 10. 16	右・藤原実資	小野宮第寢殿		小右記
1046	永承元. 12. 20	関・藤原頼通	頼通第東台		春記
1062	康平5. 正. 10	関・太・藤原頼通	頼通第対		康平記
1080	承暦4. 7. 21	関・左・藤原師実	二条室町亭対カ	故兼房亭	水左記・帥記
1087	寛治元. 6. 24	摂・藤原師実	大炊殿西対		為房卿記
1087	寛治元. 7. 1	摂・藤原師実	大炊殿西対		為房卿記
1089	寛治3. 4. 25	摂・太・藤原師実	三条殿西対カ		後二条師通記
1090	寛治4. 12. 20	摂・藤原師実	三条殿西対		後二条師通記
1094	寛治8. 12. 13	関・藤原師通	二条東洞院第東小寢殿		中右記
1096	永長元. 9. 15	関・内・藤原師通	二条東洞院第東小寢殿		中右記
1143	康治2. 8. 22	摂・藤原忠実	近衛殿寢殿	寢殿、東対代などにより成る	台記
1158	保元3. 12. 18	関・藤原基実	高倉殿寢殿	寢殿、西対代などにより成る	兵範記
1186	文治2. 7. 27	摂・藤原兼実	冷泉万里小路殿透渡殿	対を欠く	玉葉
1186	文治2. 8. 9	摂・藤原兼実	冷泉万里小路殿寢殿		玉葉
1186	文治2. 10. 17	摂・藤原兼実	冷泉万里小路殿寢殿		玉葉
1077	承保4. 10. 17	関・藤原師実	東三条殿東対		水左記
1095	嘉保2. 2. 8	関・藤原師実			中右記
1102	康和4. 7. 5.	右・藤原忠実		忠実は氏長者 摂関は空位	中右記
1102	康和4. 9. 17	右・藤原忠実		忠実は氏長者 摂関は空位	殿暦
1102	康和4. 10. 7	右・藤原忠実		忠実は氏長者 摂関は空位	殿暦
1108	天仁元. 8. 13	摂・藤原忠実			中右記
1108	天仁元. 10. 9	摂・藤原忠実			中右記
1113	永久元. 3. 28	太・藤原忠実			殿暦
1113	永久元. 4. 14	太・藤原忠実			殿暦
1113	延久元. 12. 26	摂・藤原忠実			殿暦
1129	大治4. 3. 28	摂・藤原忠通			中右記
1129	大治4. 4. 6	摂・藤原忠通			中右記
1129	大治4. 4. 10	摂・藤原忠通			中右記
1129	大治4. 7. 1	摂・藤原忠通			中右記
1155	久寿2. 4. 27	左・藤原頼長		頼長は氏長者	台記
1093	寛治7. 10. 10	関・藤原師実	高陽院東対		後二条師通記
1106	嘉承元. 7. 29	関・藤原忠実			中右記
1106	嘉承元. 9. 18	関・藤原忠実			中右記

・論義如常、關白來被住西對、^{〔日イアリ〕}
即ち、この条により当時關白頼通は西対を居所として用いていたことが知られる。

永承元年(1046)12月20日の關白頼通第の東台、康平5年(1062)正月10日の同じく關白太政大臣頼通第の対については、いずれも当時の記録からは用法が知られない。

承暦4年(1080)7月21日の關白師実の二条室町亭は故兼房の夏町亭と同一の住宅と考えられるが⁴³⁾、やはりこの対の用法を知ることとは出来ない。

寛治元年(1087)6月24日と同年7月1日の摂政師実の大炊殿の西対についてであるが、この大炊殿は師実が永保3年(1083)7月3日に新造移徙した住宅で⁴⁴⁾、寢殿を中心に西対と東対代廊とを左右に配した堂々たる規模を有していた⁴⁵⁾。上表の会場となった西対がこの時期師実の居所として用いられた事を明確に示す記録は見いだせない。しかしながら、師実が大殿(前關白)と呼ばれる様になった時代の記録『中右記』永長元年(1096)2月20日条には、前大僧正覺円が慶賀のために訪れた際の様子記されている。

被參大殿、(大炊殿、)於西對南面有御對面、(立四尺屏風、敷地敷茵、大殿布護圍座、)
覺円は西對南面で師実と対面している。即ち、西対が師実の居所であったことが知られよう⁴⁶⁾。

寛治3年(1089)4月25日、同4年(1090)12月20日の師実の三条殿西対について、この三条殿は師実により造営され、寛治元年(1087)8月26日に移徙されたものであるが、寢殿の東西に対を配したいいわゆる左右対称型の構成を取っていた⁴⁷⁾。上表の会場となった西対に関し、『後二條師通記』寛治2年(1088)11月22日条には太政大臣信長が従一位に叙されたことを慶んでの拝賀について、
秉燭之後、太政大臣之後、従一位慶被申以前、詣即出了、參攝政殿、對南面御裝束如常、殿下御裝束、太政大臣先被參、無拜、とあって、摂政師実の居所は対であった事が推測される。より具体的には同記寛治5年(1091)11月27日条により知ることが出来る。師実が三条殿寢殿を会場として一切経読経を営んでいたが、この日が結願にあたっている。

裝束寢殿奉安置母屋中間御佛、…(中略)…僧等候座、殿下(出自西對東向戸)著座給、上達部殿上人著畢、
師実が西対より出て(会場たる寢殿に向かい)座を占めたことが知られるのである。即ち師実の居所は西対であった⁴⁸⁾。

寛治8年(1094)12月13日および永長元年(1096)9月15日の摂政師通の二条東洞院第東小寢殿についてであるが、この住宅は寢殿および東小寢殿(東対)を中心として構成されていた⁴⁹⁾。東小寢殿に関しては、前に師実のところで紹介した『中右記』永長元年(1096)2月20日条にやはり前大僧正覺円の慶賀について、

被參關白殿二條殿、東對有御對面、(如初、殿下御束帶、)牽出物御馬一疋、
と記され、ここで師通と対面したことが知られる。即ち、東小寢殿は師通の居所として用いられていた。

以上、上表の会場として用いられた対が実は上表の主体たる摂関の居所であったことを得られた史料をもとに示してきた。上表はこれら居所を会場として催されていたのである。もちろん忠実が東三条殿に移徙した永久3年(1115)7月21日の例や⁵⁰⁾、基房が閑院第に

移徙した仁安2年(1167)12月10日の例⁵¹⁾に見られる様に、寢殿が正式の居所であったことに疑いはない。しかしながらこれらに於ても寢殿は居所としては常用されず、対が居所として使われていた事もまた十分に考えられるのである。ここで取り上げた住宅についても、寢殿が居所として常用されたことを示す記録は見出せない。

さて、次は寢殿が会場となった例について検討していきたい。まず、康治2年(1143)8月22日の摂政忠通の近衛殿寢殿についてであるが、近衛殿は寢殿および東対代を中心として構成されていた⁵²⁾。『台記』久安元年(1145)正月4日条によれば、この日忠通の弟・頼長の男・兼長(菖蒲)に童殿上が許され、兼長は近衛殿から忠通と共に参内することになった。

已始、束帶參攝政殿(近衛烏丸、)左宰相中將(忠基、)連車、于時菖蒲於攝政殿御出居着裝束、甲斐前司雅職(衣冠、)奉仕之、以寢殿西廂爲出居、殿下以光房被仰云、上達部可召出居者、
兼長は寢殿西庇の忠通の出居で装束を着けたことが記されるが、前に摂関の居所として用いられた東三条殿東対と高陽院東対を取り上げ出居はこれらに付属する空間であったことを紹介したことからも知られる様に、近衛殿寢殿は忠通の居所であったと考えられる。

保元3年(1158)12月18日の關白基実の高倉殿寢殿について、この寢殿が基実の居所として用いられたか否かは詳らかではない。

文治2年(1186)8月9日、10月17日の摂政兼実の冷泉万里小路殿寢殿について、この住宅は対を欠き、寢殿、二棟廊、透渡殿、東中門廊などにより成っていた⁵³⁾。寢殿に関し『玉葉』文治4年(1188)正月1日条によれば、

寅刻自方違所歸來、即改・着束帶、有四方拜事、(昨日浴後無不淨事、依今曉更不浴、)寢殿南階前儲其座、四隅舉燈如例と記され、兼実は寢殿南階前の庭で四方拝を行った事が知られる。四方拝は内裏では天皇の御在所たる清凉殿の前庭で行われていたから⁵⁴⁾、冷泉万里小路殿の寢殿は兼実の居所であったと考えられるのである。また文治2年(1186)7月27日の透渡殿についてであるが、この透渡殿は『玉葉』同日条に、

次仰宗頼、設勅使座、其儀、透渡殿敷・滿弘筵、(東三條儀、東對南廣庇設之、而康治近衛殿儀、透殿設之、准彼例也、)
とあるように、東三条殿の場合の東對南広庇に相当すると見なされている⁵⁵⁾。この南広庇は、前に紹介した様に南面出居にあたり、しかもこの住宅の主(あるじ)たる忠実の居所・東対に付属した空間であったので、この引用文の透渡殿を出居とする兼実のそもそもの居所は寢殿であったと考えられる。この上表の会場となった透渡殿は兼実の居所に付属した空間と考えて良い。

今まで検討してきた寢殿を会場とした住宅について、寢殿以外の建物がこれら主体の居所として常用された事を示す記録は認められない。

以上、上表の会場となった建物を取り上げ、ここが実はこの儀の主体の居所だったのではないかとの観点から検討してきた。小野宮第では寢殿が会場であり、しかもここが実資の居所であった事をも含めて考えるとこれまで明らかにされたのは、少なくとも得られた史料による限り、対にせよ寢殿にせよ会場となった建物はいずれもこの儀の主体となった摂関の居所であったという事である。ここで最初に立ち返って道長の二条殿を見ると、上表の会場として寢殿が用いられていた。今までの検討からすると、この建物が道長の居所

であったという事になる。二条殿の対が道長の居所であったとする記録も見出せない。

立派な対を有するにも関わらず、寝殿が上表の会場として用いられたのは、表1を見る限り、道長の二条殿と実資の小野宮第の例のみであった。そしてこれらの寝殿はそれぞれ、道長と実資の居所として使われていたのである。これら両住宅に共通するのは、入内した女のための里第としての使用が考えられていなかったという事である。

結

本論では、藤原道長や頼通の上東門第と藤原実資の小野宮第の対の儀式空間の違いの要因が、道長・頼通は対を実資は寝殿を居所として用いたことにあるとの考えを受け、では、この様に居所が異なるのは何故かについて検討してきた。これら両者に於て最も大きく相違するのは、上東門第は入内して中宮等となった道長の女(むすめ)の里第として使用された事であり、小野宮第はその様な住宅ではなかったという事である。

上東門第について、里第として使用された際の中宮等の御在所を見ると寝殿に充てられていた。そして、対がそのために用いられる事はなかった。一方、道長・頼通の居所としては対が用いられていた。摂関時代に上東門第と同様、重要な役割を果たした高陽院について、太皇太后宮や女院としてではあったがここを用いた彰子について見ると、やはり御在所としては寝殿、あるいは対の場合でも寝殿と共に用いられていた。

里第として使用された上東門第、高陽院に於て寝殿は中宮等の御在所としての役割を果たしていたのである。

小野宮第は中宮等の里第としては使われず、実資の居所としては寝殿が用いられていた。

道長の二条殿は入内した女の里第としての使用を前提とした住宅ではなかった。二条殿に於て寝殿は道長の上表の会場として使われていたが、上表が行われた他の住宅について検討すると、会場にはその儀の主体の居所があてられていた。従って、二条殿の寝殿は道長の居所という事ができる。また対が道長の居所として用いられる事もなかった。

中宮等の里第として使われる事のなかった小野宮第、使われる予定のなかった二条殿で、寝殿は実資および道長の居所として用いられていたのである。

以上の様に、道長が所有した上東門第と二条殿については道長の居所に大きな違いがあり、その違いの大きな要因は入内した女の里第として使われるか否かの違いにあったと考えられる。上東門第は里第として常に用いられたわけではなかったが、使用されなかった時でも道長は寝殿をそのための場所として空けておき、自身の常の居所としては用いなかったものと考えられる。

上東門第に於て対が道長・頼通の居所として用いられ、小野宮第に於て寝殿が実資の居所として用いられたこの違いには、平安盛期に顕著に表れた、女を入内させ、天皇家と外戚関係を築くという摂関制が大きく関わっていたと考えられるのである。

従来、臨時客を始めとする対での儀式について、何故これらが寝殿ではなく対を会場として開催されてきたのか、あるいは何故対の南面が主として用いられてきたのかが論じられてきたが、本論での

結論は、今後これらを検討する際には摂関等の居所としての対の観点から検討する必要性のある事を示している。

注

- 1) 飯淵康一：寝殿造の変遷およびその要因について、古代文化 第346号、昭和62年11月。同：元服会場としての寝殿、対、出居・曹司・侍所－平安期貴族住宅の儀式空間について(1)－、日本建築学会計画系論文集 第550号、平成13年12月。同：元服、賀茂詣・春日詣および臨時客の会場－平安期貴族住宅の儀式空間について(2)－、日本建築学会計画系論文集 第557号、平成14年7月。なお、これらは拙著：『平安時代貴族住宅の研究』中央公論美術出版、平成16年3月、にも収録されている。
- 2) 飯淵康一：上東門第と小野宮第に於ける対の儀式空間－儀式空間の違いとその要因－、日本建築学会計画系論文集第627号、2008年5月、に掲載予定
- 3) 諸史料ではこれら住宅の主(あるじ)が常に用いた建物について居所という語を用いてはいないが、本論では敢えて御所あるいは御在所の語を用いず、後述する中宮等に対する語、御在所との混同を避けるため居所の語を用いることにする。
- 4) 上東門第の時期の区分等については、太田静六：『寝殿造の研究』吉川弘文館、昭和62年2月、による。
- 5) 以上の諸儀式については主として『小右記』による。
- 6) 前掲注4)太田静六：『寝殿造の研究』及び拙著、前掲注1)『平安時代貴族住宅の研究』。
- 7) 高群逸枝：『平安鎌倉室町家族の研究』国書刊行会、昭和62年2月。
- 8) 彰子が女御となったのは長保元年(999)11月7日、中宮は同2年(1000)2月25日、皇太后宮は寛弘9年(1012)2月14日、太皇太后宮は寛仁2年(1018)1月7日。院号は万寿3年(1026)正月19日に与えられている。
- 9) 割注については()で示す。以下同じ。
- 10) 前掲注7)高群逸枝：『平安鎌倉室町家族の研究』。
- 11) 長和2年(1013)正月10日、妍子は懐妊により、大内から東三条殿に退出したが、これは上東門第が方塞りとなるためであった(『栄花物語』)。しかしこの東三条殿が正月16日に焼失したため、斉信の郁芳門第に移っている。4月13日の上東門第への遷啓はこの郁芳門第からである。本来ならば大内より直接遷啓すべきであった。
- 12) 『日本紀略』同日条。また同記4月10日条によると、御釜神も上東門第に遷されている。
- 13) 前掲注7)高群逸枝：『平安鎌倉室町家族の研究』。
- 14) 『左経記』寛仁2年(1018)4月28日条によると、威子は新造内裏の飛香舎に遷っている。
- 15) 前に紹介した、『左経記』治安2年(1022)7月8日条の威子の西対の場合は特例にあたる。寝殿は太皇太后宮彰子が用いていた。
- 16) 詮子が後の一条天皇(懐仁)を出産したのは東三条第に於てであったが、院号を得た後は上東門第も用いた。
- 17) 『権記』正暦5年(994)正月3日条によれば、詮子は上東門第を御所として用いており、同記長徳3年(997)6月22日条からも同様ここを御所として用いていた事が知られる。本文の長徳2年(996)3月28日の場合も上東門第での事と考えられる。
- 18) 『左経記』によれば、関白頼通は寛仁3年(1019)12月28日に上東門第に渡っている。妍子は頼通の女(むすめ)ではないが、頼通は道長の男(むすこ)であり、上東門第は妍子にとつての里第と見なすことができる。
- 19) 『日本紀略』長元8年(1035)8月13日条によると、頼通は新造高倉第に移徙している。
- 20) 『扶桑略記』。
- 21) 『今鏡』巻一。
- 22) 『一代要記』。
- 23) 『一代要記』。
- 24) 『春記』長暦2年(1038)11月15日条によれば、中宮姫子は清涼殿犯土の忌を避けるため頼通の高倉殿に移っている。同11月19日にはここから入内している。出産の場所は高倉殿と考えられる。高群逸枝氏も前掲注7)で同様の見解をとっている。
- 25) 『百鍊抄』寛徳2年(1045)7月4日条によれば、頼通の高倉第が焼失している。また『春記』永承5年(1050)3月12日条によれば、頼通は高陽院で御堂供養試案を催している。
- 26) 『栄花物語』巻36ねあわせ。
- 27) 彰子は頼通の女(むすめ)ではなく、頼通の父・道長の女であり、厳密

- な意味での里第かどうかさらに検討する必要があるかもしれないが、ここでは広義の里第として扱うことにする。
- 28) 前掲注4) 太田静六：『寝殿造の研究』。
- 29) 『日本紀略』同日条。
- 30) 『日本紀略』長元元年(1028)正月22日条によると、彰子は法成寺より上東門第に還っていた事が知られる。
- 31) 『小右記』同日条。
- 32) 前掲注4) 太田静六：『寝殿造の研究』によれば、敷地内の東北方に存在したと推定されている。
- 33) 因みに、高陽院での頼通の臨時客の他の例に関し、『左経記』万寿2年(1025)正月2日条を見ると、西対を会場として催されている。
- 34) 正確に言えば道長が新造二条殿に移徙したのは、寛仁元年(1017)3月16日に摂政を辞した後のことである。道長が摂政の位に就いていた期間は長くはない。本論は、単にその期間摂関の地位にあったか否かのみではなく、女(むすめ)を入内させて天皇家との外戚関係を築くことを目的とした平安盛期の摂関制の観点から考えようとしている。いずれにせよ二条殿では本文でも述べる様に、従来考えられていた様な、女(むすめ)の里第としての使用は想定されていなかった。
- 35) 吉田早苗：藤原実資の家族、『日本歴史』昭和50年11月。
- 36) 飯淵康一：藤原道長の住宅と儀式会場―藤原長者・摂関家の儀式会場の変遷過程に関する研究(3)一、日本建築学会計画系論文集第599号、2006年1月。なお、この内容は前掲注1) 飯淵康一：『平安時代貴族住宅の研究』にも収録されている。以下の本文の二条殿の性質及び移徙に関する記述はこれらによっている。
- 37) 前掲注4) 太田静六：『寝殿造の研究』。なお、西対については『御堂関白記』寛仁2年(1018)3月7日条、同4月22日条により確認される。
- 38) 『左経記』同日条、他。因みに、対での用法は知られない。
- 39) 飯淵康一：寝殿造における「出居」，「公卿座」について、日本建築学会論文報告集 第343号、昭和59年9月。前掲注1) 飯淵康一：『平安時代貴族住宅の研究』にも収録されている。本文の以下の東三条殿と高陽院についてはこれらによっている。
- 40) 前掲注4) 太田静六：『寝殿造の研究』によれば、高陽院を4期に分けて考えている。ここでの高陽院は第4期のもので、寝殿、東対、東小寝殿、西小寝殿などにより成っていた。
- 41) 周知の様に忠実は永久3年(1115)7月21日に東三条殿に移徙しているが、この時は寝殿を居所とした。しかしながら、前掲注39)で示した様に、通常は東対を居所として用いていた。東三条殿と高陽院の東対が忠実の居所として用いられた事をさらに示す例として、『中右記』『殿暦』康和3年(1101)正月朔日条、『中右記』康和4年(1102)5月26日条、『殿暦』康和4年(1102)10月4日条、『中右記』康和4年10月13日条、『殿暦』『中右記』長治2年(1105)正月朔日条などがあげられる。
- 42) 『左経記』寛仁3年(1019)12月28日条、同4年(1020)6月10日条。
- 43) 『帥記』同日条。
- 44) 『百鍊抄』同日条。
- 45) 前掲注4) 太田静六：『寝殿造の研究』。前掲注1) 飯淵康一：『平安時代貴族住宅の研究』。
- 46) もちろん、極めて公式的な行事の場合には寝殿に師実が御座すこともあった。『中右記』永長元年(1096)正月7日条によると、関白師通は従一位に敘せられた事をよろこび慶賀に訪れたが、南庭から(寝殿に御座す)師実に拝礼した事が知られる。
- 47) 前掲注4) 太田静六：『寝殿造の研究』、前掲注1) 飯淵康一：『平安時代貴族住宅の研究』。
- 48) 『爲房御記』寛治2年(1088)12月9日条他からも、西対が師実の居所であった事が知られる。
- 49) 『中右記』承德元年(1097)9月23日条。
- 50) 『殿暦』同日条、『類聚雑要抄』。
- 51) 『兵範記』同日条。
- 52) 『台記』康治2年(1143)正月2日条。
- 53) 前掲注4) 太田静六：『寝殿造の研究』。
- 54) 『西宮記』新訂増補故実叢書。
- 55) 引用文の割注に、近衛殿でも勅使座に対して透渡殿が用いられたとあるが、当時の記録からこれを確かめる事は出来なかった。『台記』によれば忠通は康治元年(1142)7月6日、同12日に行っている。

追記

本論文集、第627号、2008年5月に掲載された拙論：上東門第と小野宮第に於ける儀式空間―儀式空間の違いとその要因―、にPDF変換の際に生じた誤記がありますので、この場をお借りしてお詫びをすると同時に、正誤表を載せたいと思います。誤記の部分はいずれも太字のゴシック体となっております。

本文について		引用文について	
誤	正	誤	正
脩	→ 卿	脩	→ 卿
極	→ 妍	艶	→ 通
		徘徊	→ 平
		葦	→ 達
		輩	→ 道

(2008年5月10日原稿受理、2008年10月15日採用決定)